

第1回
台東区基本構想策定審議会
小委員会第1グループ

日時平成29年12月1日
会場台東区役所10階1001会議室

台東区企画課

○出席者
(8人)

委員長	有村 久春	委員	西 智子
委員	伊藤 正次	委員	石塚 麻梨子
委員	山藤 弘子	委員	黒田 収
委員	峯岸 由美子	委員	石原 喬子

○欠席者
(2人)

委員	太田 雅久	委員	小坂 義久
----	-------	----	-------

○事務局
(15名)

企画課長	前田 幹生
人権・男女共同参画課長	古屋 和世
都市交流課長	段塚 克志
区民課長	飯田 俊行
子育て・若者支援課長	三瓶 共洋
子ども家庭支援センター長	川口 卓志
庶務課長	岡田 和平
学務課長	山田 安宏
児童保育課長	佐々木 洋人
放課後対策担当課長	福田 兼一
指導課長	屋代 弘一
教育改革担当課長	小柴 憲一
生涯学習課長	小川 信彦
スポーツ振興課長	廣部 正明
中央図書館長	齋藤 明美

(午後 7 時 0 0 分開会)

1. 開会

○事務局

—配布資料及び委員出席状況の報告—

2. 議題

(1) 小委員会の進め方について

○事務局

—小委員会の進め方についての説明—

○委員長

ありがとうございました。今、小委員会の進め方について事務局から説明がございました。この委員会で担当する子育て、教育、生涯学習、パートナーシップの4分野について、それぞれ20年後の望ましい姿を導き出すことが、私たちのゴールというか目標でもございます。そのゴールに向けて、本日は第1回目でございますので、審議会の延長のような形になりますけれども、これまでの基本構想検討シートを活用して、4分野の課題と課題解決に向けた方向性について審議してまいりたいと思います。

第2回目の小委員会は、ゴールである20年後の望ましい姿を考える上で、いわばアイデアを出し合う回になろうかと思えます。第3回目では、最終的には四つの分野の20年後の姿を私どもでまとめて、最終結論を出していきたいと思えます。

今、事務局からもお話がありましたけれども、審議会に出る多くの意見が複数分野に関連してくると思えます。特に私たちの担当する教育分野はそれが言えますので、他分野との横の関係を意識しつつ話し合い、この小委員会で望ましい20年後の姿を導き出したいと考えております。ぜひ、審議のほどよろしく願いいたします。今までの点で、何かご質問ございますか。よろしいでしょうか。

(2) 基本構想検討シートについて

<子育て分野について>

○委員長

それでは、基本構想の検討シートについて、分野ごとに意見をいただきたいと思います。
まず、子育て分野についてご意見をいただければと思います。

○委員

個別の論点ではないですが、先ほど東京都の資料に基づいて、2040年代の社会状況等についてご説明いただきました。第5回の委員会を所内で欠席したので、もしかしたら的外れかもしれませんが、恐らく子育てや教育分野を見通すというときには、台東区の今後の子供の人口といますか、見通しがどうなるのかということの認識が必要だと思っています。事務局にお伺いしたいのですが、地方創生の下で、「人口ビジョン」と「まち・ひと・しごと総合戦略」を台東区でもつくっているはずですので、今後例えば0歳児から5歳児の人口がどういう見通しになっているとか、あるいはさらに15歳までの人口がどういう見通しにあるのかというようなデータがあれば示していただきたいというのが、議論の前提としての要望です。

○委員長

今の件で、前にも説明があったような気もしないでもないですが、改めてお願いいたします。

○事務局

台東区人口ビジョン・総合戦略（以下「人口ビジョン」という）において将来人口推計は実施しておりますが、それは平成27年に実施をしております。その後、今回の基本構想の策定に当たりまして、あらためて人口推計を実施させていただきました。結論から言いますと、人口ビジョン策定時と、大きな差異はありませんでした。ちなみに0歳から14歳の人口の見通しですが、平成39年（2027年）に向かって増加を続けます。その後減少傾向に入りますが、大幅に減少するというのではなく、微減傾向で進み、平成74年になりますと、ちょうど今の人口と同じぐらいのレベルまで落ちてくる、そのような傾向が0歳から14歳では見てとれます。従いまして、0歳から14歳の人口見通しにつきましても、ピークが若干早まりまして、今回推計で言いますと、平成34年（2022年）にピークを迎えて、以降減少傾向に入る、そのような傾向になっています。後ほどデータにつきましても各委員にお配りさせていただきたいと思います。

○委員長

今までの説明の中に、人口推計の話はあったような気がしましたが、どうでしたか。

○事務局

第2回の審議会で、人口の見通しについてはご説明させていただいているのですが、全体の人口と年少人口、生産年齢人口、高齢人口の三つしかお示ししていませんでした。

○委員長

今の委員がおっしゃっていただいたことは、非常に大事な視点で、われわれが検討するベースになります。今、課長にご説明いただいた資料については、後でまた用意ができるときにしていただいて、とりあえず、第2回審議会ではどの資料で人口の見通しについての説明が行われたかを教えていただけますか。

○事務局

10月20日に行われました第2回審議会の資料2でございます。A4の1枚ものです。

○委員長

もう1回説明してもらって良いですか。

○事務局

第2回審議会の資料2でございます。こちらにつきましては、新たな基本構想を策定する基礎資料とするために改めて実施したもので、平成29年4月1日の住民基本台帳人口を基本にしております。日本人はコーホート要因法、外国人はコーホート変化率法といった手法を使っており、前回の人口ビジョンを策定したときと同じ推計方法を使っております。その裏面の項番4の推計結果をご覧ください。現在の人口が19万4,639人ですが、平成54年のピークに向かって増加を続けてまいります。その後、微減傾向になっていくという流れです。こちらが全体の推計です。

年齢区分別人口の将来推計につきましては、こちらもほぼ同じようなピークになっておりますが、年少人口のピークは平成39年で、生産年齢人口のピークは平成44年、高齢人口のピークは人数で言いますと平成74年の6万8,000人余りというような状況になっております。先ほど東京都の資料の中でご説明をした高齢化率の話ですが、65歳以上という欄を右横にずっと見ていただきますと30パーセントを超えるのが平成64年ということです。

ですから、今後おおむね20年後を見据えたこの基本構想の策定に当たっては、人口増の局面にあるという状況になっております。

○委員

ありがとうございました。私も忘れておりました、確認が取れていませんでした。今のご説明ですと、おおむね20年後に向けて、全体としては人口が増加していくのですが、年少人口のピークが平成39年ということですから、今後10年間は子供が増えていくけれど

も、その後減少傾向に入っていくというのが前提になっているということでした。特に子育てという面では、0歳児から5歳児という人口についても考えていかなければいけないと思っています。

○委員

私の一番下の子供は小学校5年生なのですが、8年前は待機児童でした。そのときは、仕事をしたいけれども、待機児童だから仕事ができない、でも保育園は仕事をしないと入れないという状況でした。私は、これは逆なのではないかということを感じています。現状台東区は子供の数も待機児童も増えている中で、根本的にどうしようとしているのが一番気になるところです。

○児童保育課長

検討シートの裏面の表3のところに、0から5歳の人口の推移と待機児童の推移ということで資料を載せております。基本的には、この0から5歳の人口が増えていくという状況と、あとはその人口の中でも、保育所への申し込みの割合も増えているということで、それに伴って申請数も伸びています。区のほうでは、その申請数に対応する施設整備を何とか進めていきたいということでやっているところではありますが、ご覧の折れ線のグラフのとおり、待機児童が増えている状況であります。基本的には、今この需要の見直しなどもやっているところではありますが、入りたい方を受け入れられるような施設整備を今後も基本的には進めていきたいという考えです。

○委員長

実情においてこのグラフから見ると、うまくいっていないという見方ができそうな気がするのですが、そこの辺りが、委員がご指摘された何か逆の発想をしないと難しい点があるのではないかということですね。

○児童保育課長

確かに需要については、これも台東区次世代育成支援計画という計画を平成27年に策定して、その中で需要の見込みというのも出して、整備を進めてきたのですが、その計画のものよりも実際の伸びがかなり大きくて、その乖離が生じています。今年度はその見直しをやっているところで、それに即して取組を推進していくということです。

それから、保育につきましては、基本的には保育の必要度に応じるということで、それをある程度客観的に見られるかたちで、ご存じのとおり指数というポイント制でやっております。ご両親が働いているとか、そういったところのポイントが今は高いような状況であります。確かにそこについてはいろいろな考えがあるということは、こちらとしても認識はしているのですが、ある程度の基準に基づくとということで、現在のやり方のように

ご両親の就労状況によって保育の必要な度合いを判断しているところです。

○事務局

補足させていただきます。参考資料2の10ページの高齢者と子育て世代の社会参画というところをご覧ください。東京都の目指す姿として、ライフステージに沿って多様で柔軟な働き方が選択できるということがあり、2040年頃にはそれが社会条件になっているだろうと東京都が見解を示していますが、やはりそのようになるのが本来良いのだろうと思っています。ただ、児童保育課長から説明がありましたとおり、現状がまだなかなか追いついていないという状況があります。ですので、委員のご指摘も、基本構想を考える上で、そういった考え方で進めるべきではないかというご意見として承らせていただければと思います。

○委員

ありがとうございます。私もこの場に参加させていただいているので、ぜひ20年後には待機児童が0になっているという状態に台東区がなるような基本構想を練っていければと思いますのでよろしくをお願いします。

○委員長

理想的には待機児童はマイナスになって、逆に「入る人はいませんか」という位がゆったりしていて良い気がします。そこら辺が20年後の目指すところだと思います。

委員が先ほどおっしゃった「逆の視点」というのは、何が逆になったら良いということですか。

○委員

今、お母さんたちも働くという良い傾向になっている割には、台東区は待機児童が多いので、働きたいけれど子供を預けられないので働けない、生活をどうしよう、という方が非常に多いのです。ですから、箱をしっかり作り、働きやすい環境を整備していただきたいです。100パーセントの原因ではないですが、そういうストレスで虐待をしている保護者の方とか実際に小学生でもいらっしゃるので、ストレスを軽減させてあげたいというのが私の率直な意見です。

○委員

20年後を見据えて、年少人口が10年後にピークを迎えて、若干減りつつも横ばいということを考えていくと、待機児童を減らすだけでなく、減らし方も重要ではないかと思えます。いろいろな手法で待機児童解消というのはあるわけですが、やはり全体に地域の格差が生まれているのが事実です。台東区に限らず東京都内全般を見ても、小規模保育

園、認証保育園、それから無認可、それぞれの保育環境が果たして良いのかどうか、民間との格差はどうか、疑問が生じます。もう一つは、子供の成長から見ると、20年後も昔と変わらない部分をきちんと守るといっても土台に置いた上で、その格差をなくすための方向性もきちんと見据えておかないと、数だけの勝負になりがちというのがちょっと怖いと思います。次世代育成についての議論の中でも、いつも数が出てきてしまうので、それを追いかけるような計画にならざるを得ないというのが現状ですが、20年後を見るのなら、子供の育成において残すべきもの、台東区として守っていかなければいけないものをきちんと基本に置きながら数を整理し、増加するべきところは増加して、税金を投入してほしいです。そうしていただきながら、子供の育成における質の格差というものも考えていきたいというのが希望です。

○委員

ちょうど私の家の前に保育所を建てておまして、私も台東区で子育てをしているので、立場的にもぜひ賛成なのですが、台東区では土地を確保するというのがとても大変だと思います。今回もそこで建てるということで、本当に2～3メートルぐらいしかその施設と家の間がなく、こちら側に音が漏れないのかということで、かなり住民との話し合いがなされました。また、そこを建てるに当たって4月にオープンできるように建てなければいけないということで、無理なスケジュールから土日関係なく建てている現状があったりします。台東区の限られたスペースを、どのように子供の育成に使っていくか、総合的に考えていかなければならないと思います。以前お話しがあった、高齢者と障害者の方との複合施設というかたちで、子供のためだけに建てるというよりも、融合させるというようなかたちで、子育てと高齢者のことを両立させていかなければならないと思っています。

○委員

最近色々な場所に認証保育所や小規模保育所ができていて、台東区はいろいろ工夫をされて、小さな保育所を整備されているのだということ、道を歩きながら感じています。待機児童の部分に関しては、最近人数のことがあって注目を浴びていますがけれども、過去になかったかということ、過去にもありました。自分の子供が生まれたときにも待機児童というのはやはり課題になっていたわけです。それが15年後になって、解決したのかということと解決してなく、根本的なところに問題があるのだと思います。先ほど委員からお話があったように、数を動かしてもどうにもならない話であって、それは台東区だけではなく、他の自治体を見ていると、増えたり減ったりを毎年のように繰り返しており、本当に保育所だけをつくれれば良いのかということそうではないです。箱をどうやってつくるのか、どの場所につくるのかではなく、そもそも子供たちのいる場所とはどういうところか、区としては子供の育ちの場所をどのようにしていくのかを考えないと、また10年後も同じような話になるのではないかと危惧しています。もう少し大きな視点、おっしゃったような福祉

の分野と連携して、高齢の方も一緒に暮らせる場所であるなど、これからは子育て分野に限って待機児童を考えなくても良いのではないかと感じています。

○委員

子育てしやすいまちというのは、確か東京都での一番は豊島区だったのではないかと思います。なぜ豊島区がそのように子育てしやすいまちになったのかを知っていれば、ご説明してもらいたいと思います。また、保育所もちろん大切だと思いますが、それと並行して、保育士も確保していかないといけないと思っています。台東区も来春は5か所ぐらい保育園を建てる予定だったのではないかと思います。ところが2か所か3か所ぐらいで、今おっしゃったように土地の確保のことがいろいろあるようです。

○委員長

教育をやっている人間からすると、赤ちゃんであろうが何だろうが、子供はある意味で賑やかであって当たり前です。そういった子供に対する見方というの、いろいろな部分で変えていく必要があるような気がします。そこが大事な部分でもあるような気がしますし、先ほど委員もおっしゃったのですが、子育てをどのようなビジョンでやるのかということ、確かに場所をつくれれば良い問題ではないというのはよく分かる話です。担当のほうで、こういうものが理想だというものがあれば教えてもらえるとありがたいです。

○児童保育課長

先ほどの豊島区の話なのですが、待機児童というところでは、確かに豊島区は平成29年4月1日の待機児童がゼロということで、待機児童を解消しています。その前は105人でしたがゼロになったということで、いろいろ施設を整備してこういう結果になったのかと思っております。

子供の居場所について、大きい視点でお話をいただいております。確かにおっしゃるとおり、そういった視点は重要というように私どもも認識しております。ただ、担当としては、保育の需要、申し込みで窓口に来る方の絶対数が多くなってきていて、どうしてもそのニーズには応えなければいけないということで、なるべく早くいろいろ施設を整備したいと考えています。また、4月入園という要望がかなり多いので、何としてもその4月開設はやっていきたいと思っています。担当としては、目先の要望にはなるべく早く応えていきたいという思いがあります。ただ、おっしゃるとおり、将来的にこの状況がどこまで続くか分からないということはあると思いますが、やはり子供の環境がどうあるべきか、というのは重要な視点であると思いますので、目先の対応はしつつも、その視点は考えていかなければいけないと思っています。

○委員

目先の要望として待機児童解消は必ずやらなければいけない課題だと思っていますから、その取り組みは非常にありがたいし、やっていっていただきたいです。それと並行して、「地域で子供を育てていくことが、どれだけ区の将来に対して重要な課題であるか」ということを、かなり強いメッセージとして区から発信していくことが重要であろうと思います。20年後、今赤ちゃんで生まれた人が成人しているわけですがけれども、その方達が「子供が赤ちゃんに触れる」、「自分が親になったときに子供を育てる」、「保育園の騒音は未来をつくるためには重要な部分の一つである」というような感覚が育つ、そのようなことを並行してやっていかななくてはいけないだろうと思います。

それから、地域住民のファミリーサポートシステムのような、お互いに預け合ったりする部分の醸成も並行してやっていく必要があります。子育ての重要性をアピールすると同時に、区民が参画する部分というのも非常に重要な要素ですので、高齢者、実際には30代からの啓蒙が必要かと思います。わが子だけに目が向く時期に、地域の子としてお母さん、お父さんの目を広げていくような働きかけ、それはイベントでも良いですし、学校教育を通じてでも良いと思います。保護者支援、子育て支援という言葉だけが若干独り歩きしてしまいがちなので、住民全体が共同で参画するということを常に発信し続けていく台東区であってほしいと思います。

○委員

子育て中の親子の居場所づくりが必要というお話をこの前いただきました。私も鳥越2丁目で町会の活動をさせていただいているのですが、やはり年々マンションが増えており、そのマンションで何人くらいお子さんがいるのか、なかなか把握しきれません。町会で「親子で餅つきに来てください」というアピールをしたくても、なかなかそれが対象者に届かない、掲示したところでも届かないということが結構あります。まちでも、古くから住んでいる方を中心にこのよう案内をやっていただいているのですが、色々な方が混在していて、なかなかマッチングしないというのが感じられます。

子育て中の親が、居場所がなかったり、子育てで悩んだりしたときに、赤ちゃんを連れて遊べる施設があり、私もとてもお世話になりました。そういう施設や、例えば地域の小学校で親子が参加できるイベントを開催するなど、学校もそういった形で親子がいられるような場所を開放するという案も良いのではないかと思います。

児童館や学童保育にしても、石浜小学校のほうは進んでいっしょって、学校内に子供の居場所をつくっているようですが、南部地区の育英小学校では、児童館までかなり歩いていかないと行けません。すぐ隣が秋葉原というような立地で、学童保育もちょっと歩いていかなければ行けません。一つの場所に子供を一定時間閉じ込めてしまうのは申し訳ないのですが、親の就労の有無に関わらず子供が利用できて、かつ地域の方が子供に宿題などを教えることができるクラブ活動が学校の施設内にあっても良いかと思います。

○委員

今後台東区としてやはり力を入れていくといたしますか、将来的なところで考えていかなければいけないのは、児童虐待等への対応だと思います。一応公式的には、いずれ台東区は児童相談所を独自で持つということになると思います。この20年のうちにそういう状況が生まれるということですから、この部分はやはり今まで都に任せていた部分もかなりあったと思うのですが、区としてどのようにイニシアチブ（主導権）を取るのかというような視点というの、この分野に関してはかなり重要になってくるのではないかと考えています。

○委員長

非常に大事な指摘をしていただきました。私も申し上げようと思っていたのが、要保護児童数の増加です。この増加というの、実は図3の待機児童数と非常に関連があって、全然別な数字ではないのだらうと思います。その辺を考えると、先ほど皆さんの議論にあるように、子育てというのは単に親子の問題というよりも、そこから地域であるとか、子育てのシステム、二十歳ぐらいまでの間の仕組みづくり、居場所づくりをどうするのかという問題でもあると思います。新宿区に、小学校の4階が高齢者施設で、2階3階が小学校、1階が保育施設という、そういう仕組みの小学校があったと記憶しています。これからはそういった学校施設を活用するというのも、20年後の姿には考えられそうな気がします。そうすると0歳から100歳ぐらいまでの間に、いろいろな居場所というのがある程度確保可能だと言える気がします。あるいは、高齢者の施設と乳幼児の施設が一緒になるとか、色々なことが考えられ、それこそ横断的な考え方がとても生きるのではないかと考えています。そういった意味では、親子の関わりが広がる部分にはどのようにしたら良いのか、国の行政的な仕組みで言うと、保育は厚生労働省、学校教育は文部科学省と分かれていて、なかなかその接続がうまくいきません。その辺も、子供というベースを考えれば、連動して良いのではないかとと思うところもあります。

子育て分野のところでご意見をいただきましたが、一応ここで区切らせていただきたいと思います。

<教育分野について>

○委員長

それでは次の教育分野について、皆さんご指摘の点があればおっしゃっていただければと思います。

○委員

これまでも議題に挙げさせていただきましたが、外国人の児童が増えているという問題は、きちんと話し合っていかなければいけない時代だと思っています。区民に占める国籍、地域別を見ましてもこれだけ増えてきています。

○事務局

参考資料3が小中幼稚園の外国人の在籍状況、参考資料4が区民に占める国籍別の人数ということでございます。

○委員

実際、「母国から呼び寄せた子供が小学校1年生の授業に付いていけないのでまず日本語を教えてほしい」というニーズがとても多いです。また、資料の小中学校における外国人児童の割合を見たとき、児童の国籍が中国や韓国などの外国籍の場合はこの数なのですが、外国人という位置付けもいろいろありまして、両親も子供も外国籍という場合の他、例えば父親は日本人、母親は外国人で子供は日本国籍を取っているけど日本語は話せない、というケースもたくさんあります。外国にルーツが半分はあるという方も入れたら、多分数字は変わってくると思います。

私の住んでいる地区は、1つのクラスの中に、完全に外国籍の子が3～4人、外国にルーツが半分あって日本語が分からない子が4人位混在している状況です。このように、外国籍で日常生活の日本語がままならない子の他、シングルマザーの家の子、障害をお持ちの子、進学熱の強いお子さんなどが混在しています。

この前もお話いただいて「そうだなあ」と思いましたが、なるべく明るい視点から教育という問題を考えていけたらと思います。クラスや地域にこれだけ外国の方がいますので、20年後は確実に私たちが辿ってきた育ち方と違うかたちで子供は大きくなります。なので、なるべくグローバルな社会を主体的に生き抜いていけるような、そういう育成をしてもらいたいと思います。ですから、英語教育も机の上で丸暗記をやるだけでなく、実際にできなくても良いですから、「たくさん来ている観光客の方を習った言葉でガイドしてみよう」とか、クラスにいる外国の子供を交え、「もし中国の方が日本に旅行で来たらこういうところが喜ぶかもしれない」、というグループワークをしたりするのが良いと思います。

それからもう一つお願いしたいのは、私は放課後に宿題をやれない外国人の子供の家に行って、宿題を手伝ったりしています。それは日本語の資格を持っている者でなくてもで

きるレベルのもので、例えば算数でしたら、足すや引くという言葉が分からなかったりするるので、図で示したりしながら、簡単な日本語での学習サポートを行っています。有料が良いと思いますので、例えばシニアの方や主婦の方等が、登録制にしてそのような家に行って学習サポートをしていけたらありがたいと思います。なぜその話をしたかという、日本語ができないから学習についていけない子や、先生や他の友達との習慣の違い等から色々な摩擦・ずれがあって、なかなかクラスにとけ込めない子が、夜遅くまで公園で外国人の子供同士でゲームをしていて、将来的には非行に走っていく可能性もあります。この子達を台東区を支えていく一員として育てていきたいと思っています。

○委員長

ありがとうございます。非常に大事な話をしていただきました。外国人を切り口にしながら、共存する、これは学校教育にとっても求められるところです。この点について事務局で提案できる点はありますか。

○教育改革担当課長

現在行っている事業として、日本語指導というものがございます。この日本語指導につきましては、来日した外国籍のお子さんの母国語と日本語の両方に精通した講師を派遣して、学校という馴染んでいかなければいけないその場においての個別指導をするものです。したがって日本語を教えるというのはもちろんなのですが、日本の文化というものも教えたり、友達とのつなぎ合わせ等を支援しています。それからお子さんによっては来日するに当たって、必ずしも納得して来日しているとは限らないので、母国語を話せる講師にお子さんが悩みを打ち明けて、学校がそれに対して保護者の方と相談したりというような形を取っているところでございます。確かに中国語の派遣講師が一番多いのですが、今、委員がおっしゃいましたように、国籍は日本なのですが、日本語が話せないお子さんも多々おりますので、そういうお子さんたちにも派遣しているところで、この事業につきましても充実を図っていきたいと思っております。

○委員長

その体制について、区として十分と認識しているのか、もう少し足りないのか、その辺りはどうでしょうか。

○教育改革担当課長

一応事業ですので、上限が何時間、そして延長は何時間まで、という基準は設けてはあります。ただし、これは状況によって様々で、例えば中国語という言語の場合、その学校の中に同じ中国語を話せる子がいるとなれば、一定の生活言語を教えるだけでその学校には馴染んでいくだろうということが考えられます。ただ、その学校にこの言語は1人しか

話せないだろうという場合は、その子が孤立することがあってはいけないので、そういう場合は延長、さらに規定にはないのですけれども再延長というようなことも行います。小学校5年生6年生、あるいは中学生など学齢が上になってくると、単なる生活言語だけでなく、学習するために必要な言語、学習言語も教えていかなければいけないため、一層時間数は増やしていかなければならないというところで、そこについても配慮しながら柔軟に対応してございます。

○委員

今お話しいただきまして、本当にそのとおりだと思います。台東区は確か40時間を上限で、必要に応じて24時間までが延長可能というかたちで、日本語のサポートをいただいていると思います。多分その時間を増やせば解決できる問題と、増やしたところで解決できない問題をお子さんは抱えていて、日本語だけではないサポートは必要になってくるかと思います。

それから、台東区らしさというか、地域住民でそこをお互い助け合っていくというところが良いところだと思います。例えば子育てでは、ファミリーサポート制度があって、ちょっと買い物に行くので見てほしいとか、母が病気なのでちょっと見てほしいというので利用できるかと思うのですが、そういったかたちの支援が外国籍の親に対してもあると良いと思います。学校の先生だけに任せていても、親は学校の様子を何も知ることもなく、家の様子を先生に伝えることも少ないので、地域の人が学習だけでなく、親への子育てサポートしていくことが大事です。家族をサポートするというかたちで、何かできないかと思います。それを無料では大変だと思うので、有料制にして、サポートする側もされる側もフェアな関係をつくることで、続いていくのではないかと思います。

○委員長

ありがとうございます。今、親のサポートという話が出ました。区民課などで外国人の親のサポートのシステムはあるのですか。例えば、台東区に転入した際に、住民の過ごし方、例えばごみの出し方を説明するなどあると思うのですが、そういう仕組みと一緒にならないと今の話は難しい気もしました。いかがでしょうか。

○区民課長

委員長ご指摘のとおり、まず台東区に越して来られた外国人の方には、どこの自治体でもやっているのですが、台東区のいろいろなルール等が記載された外国語のガイドブック、生活便利帳のようなものをお渡ししています。3年に1回程度の頻度で更新し、転入手続の際にお配りしています。その他、各セクションで、例えばごみの問題でしたらリサイクルの担当課、マンションの関係ですとマンションの担当セクションなど、各セクションによって外国人の方の色々なご相談を受けるので、セクションごとに外国人の方への対応をや

っているというのが現状です。

その他、外国人に対する日本語教室の開催や、日本人に対しても外国人へ外国語でアプローチするのではなく、外国人でも分かるようなやさしい日本語を使ってゆっくりと分かりやすく話していけばある程度通じる、ということ講座等で案内しているところです。

○委員長

やさしい日本語ということで、いわゆる言葉だけではなくて表情などで感じ取る部分もあるので、今のアプローチは大事だと思います。この話を聞くと、台東区にいる外国人のサポートとして、例えば外国人サポート課というものをつくって、面倒を全部見るようなことができれば非常に良い気がします。「台東区は外国人にやさしい区だ」というのも一つのキャッチフレーズになります。僕はいつも思うのですが、上野の山の文化や伝統を考えると、国際都市台東区であればこそ、そういう外国人サポートの課があっても良さそうだと思います。余計なことを言うようですが、例えばそこの課の職員の中に外国人の方が区の職員としていらっしゃるなど、そういうような発想を変えた組織というのも考えて良いのではないかと、課長の話や委員の話聞きながら思ったところでした。

やはり学校教育にあって、子供を区別したり差別したりすることは絶対にあってはならないことで、どの子も一緒なわけです。大人も全て一緒ですが、どの子も一緒と考えた上で個別的な対応は成り立つわけですから、その辺りを考えたビジョンができると良いと思って理解したところです。

○委員

学校からの通知というのは、どの公立小中学校でもそれほど内容が変わらないと思います。父母会への参加や運動会のお知らせなど、きっと共通していると思います。そうした通知を、多言語化が難しかったら、本当に簡単な日本語でも良いと思うので、それを学校間で共有しネットワーク化すると、とても助かると思います。公立小中学校で共通で使えるものを区でつくっていただけると助かります。

○委員長

今の話で、アイデアがあれば教えていただけますか。私もどこかの学校で、学校便りを2種類か3種類の言語で発行しているというのを聞いたことがあります。今機械に通すと言語が変わるというソフトもあるように聞きますので、可能なのかと思いました。それこそAIの時代になれば、いとも簡単な仕事なのだろうと思います。非常に良いアイデアだと思います。

○委員

以前テレビで小学生か中学生が外国の方を観光案内していて、すごいなと思いました。

台東区は観光区としてベストだと思っています。そういう教育の仕方は度胸もつきますし、会話することによってどんどん覚えます。そういう教育も良いのではないかと思います。

それから、確かに外国の方がどんどん入ってくると思いますし、そのお子さんたちも増えていると思います。それだけではなくて、20年後の先を考えるならば、やはり障害者も受け入れる環境づくりをすることも必要ですし、また、性同一性障害も20年先を考えるならば、その辺の環境づくりも今から受け入れ対策や環境づくりも必要かと思っています。

○委員

区の抱える課題の5番、6番ですが、個別教育的支援が必要な児童生徒、それから不登校や引きこもりの増加とありますが、もう一つ、発達障害、自閉症スペクトラムと言われるような子供たちの増加も言われています。そのような子が、学校で生活ができ、かつ社会でも生活ができる20年後の姿というのをきちんとイメージして教育の中に取り込んでいく、そういう子供たちの居場所の確保を、教育として取り組んでいく姿勢が非常に重要かと思っています。

変な話ですが、日本のリカちゃん人形にはいないけれど、外国のバービー人形には「車椅子の友達」という人形がいるのです。私もそれを子育てバリアフリーの学会で知って、これこそ教育だと思いました。そういう視点の中できちんと共に育ち合うということ、障害を持っている人もそうですし、引きこもりの問題は非常に難しい問題ですけれども、不登校の子供たちが社会に参画していける、引きこもりというかたちになっていかない場所をきちんとつくっていく教育の視点はとても重要なのではないかと感じているところです。

○委員長

ありがとうございます。非常に大事な指摘をしていただきました。特別支援教育、あるいは性同一性障害の子供たちの教育問題、その辺りで何か教育委員会でコメントがあったら教えていただきたいと思います。

○指導課長

まず性同一性障害等については、これはこの問題だけでなく、台東区は人権教育を中心に、人に対する差別や偏見を持たないということを大切に各校での指導を進めております。ここは人権教育、また道徳教育、そういったことの総合的なところから、差別解消という視点で推進をしていきたいと考えております。

それから特別支援教育につきましては、本区では本年度から特別支援教室という制度を全面実施しております。これまでは情緒障害等があるお子さんにつきまして、ある学校が特別支援学級という学級を持っていて、そこにその学校以外の子供たちが、その学校に移動して授業などを学ぶというかたちでしたが、それを今年度からは4つの拠点校をつくり、その教員が、自分の拠点校に4つあるグループ校を巡回して回るというかたちで指導を

進めております。このことによって、特別支援教室で学ばない曜日については、通常学級でその子たちは学んでいるわけですが、その特別支援教室を担当する教員が専門的な面から通常学級の担任へ指導の方法などもアドバイスするということができるようになってきております。また、特別支援教室に在籍していないお子さんについても、通常学級で困難が生じるお子さんについては、観察や助言ができるというようなかたちになっておりますので、今後この特別支援教室の制度については、さらに充実を図ってまいりたいと考えております。

○委員長

ありがとうございます。今、外国人の問題、性同一性障害の問題が挙げられました。台東区は人権教育を昔からやっているかと思いますが、委員ご指摘のように、将来的には、性同一性障害がかなり増える気がします。実際に今小中学生で、そういうことで配慮している児童生徒が台東区にいるかどうか、そういう情報を聞いてよろしいですか。差し支えない範囲でお願いします。

○教育改革担当課長

以前在籍していて、今はもう卒業しているというお子さんがいることは把握しております。現時点での状況については、お答えは控えさせていただきたいと思います。

○委員長

ありがとうございます。できる対応をしていただいて、それはもっと積極的に対応する必要があるということだと思います。

○委員

今のお話を伺って思ったのですが、発達障害、自閉症スペクトラムと同様に、アレルギーを持っているお子さんもここ数年とても増えています。小学校に伺うと、1クラスに1人はエピペン（急性・重度のアレルギー反応であるアナフィラキシー症状を一時的に緩和する補助治療剤）を所持しているらしく、その率はここ数年ものすごい勢いで増えているようです。直接的ではないですし、どういう視点で見たら良いのか分かりませんが、そういった子供たちもこれから増えていくだろうと、想定の中に入れておいたほうが良いかと思います。

○委員長

台東区でもアレルギーのお子さんに対して給食に配慮していますよね。その辺で何かコメントがあったら教えていただけますか。

○学務課長

給食につきましては、委員長がおっしゃったとおり、お子さんのアレルギーの状況をあらかじめ保護者の皆さんによく確認させていただき、実際に必要な除去に関しては徹底してやっているということで対応させていただいています。また、エピペンのほうにつきましても、話が少し広がってしまうかもしれませんが、こちらにも実際に学校の先生方のほうでも打つという状況が発生した場合に備えた研修も行っている状況でございます。

○委員長

この食の指導は学習指導的にも大事な中身になっているようでございます。あれは5年ぐらい前でしたでしょうか、調布で大きな事故がございました。あれ以来、教育委員会も学校も気を使って、アレルギーに対応しているように思いますので、台東区も万全な措置を取っているだろうと思います。そういった意味では、これから学校の中で栄養を専門とする人たちがどのように働くかというの、これからのビジョンとしては考えなければいけないだろうと思っていますところなんです。

それから、先ほど委員がおっしゃった観光案内している中学生、これは台東区の特徴だと思います。もし良かったら説明していただけますか。

○指導課長

現在も全ての小中学校ではありませんが、例えば谷中小学校であれば、谷中マップを日本語と英語でつくり、それを観光で訪れた方にお渡しするであるとか、田原小学校では浅草寺のところで来外者に対して英語でインタビューをしたり折り鶴を渡したり、このような取り組みを進め、それを校長会等でも情報交換をしているところです。先ほど委員からもお話があった、英語の授業で、ただ英語を教室でやっているだけではないというところは、各学校もそういった意識を持って取り組みを進めているところでございます。

○委員

私が言ったのはちょっと違います。生徒が英語で観光案内をしています。マップを配るとか、そういう単純なことではなくて、生徒が外国の方々に観光案内をして、英語で説明しています。それを大人がそばにいて、一緒に英語を勉強しながら度胸をつける、そういう日本人にこれからなっていきたいと思っています。

○委員長

とても大事な指摘だと思います。中学生が卒業して高校生、大学生になったりして、先輩がまた後輩をサポートする縦の流れをつくるのも良いのかと思っています。そういういわゆる外国人サポーターのようなコミュニティができないものかと思っています。そうしますと、台東区の子供たちも国際的に開かれていくのではないかと思います。

○委員

石浜小学校や育英小学校では、和太鼓を子供たちにやらせたりしています。そういった子供たちが地域で学び伝統を受け継いだものを、浅草や上野などに来ている観光客に披露する仕組みをつくっていただきたいです。

3年生ぐらいになると、まちなみコンクールという、「台東区の僕のお薦めのスポット」を大きい画用紙に絵で描くことが夏休みの宿題になっています。それが選ばれると、区役所1階や台東病院等に飾っていただけます。ありきたりのスポットではなく、谷中にある古ぼけた昭和らしい駄菓子屋さんや大きい杉の木など、台東区で生まれ育った子供がぜひ見せたい風景を毎年描いておりますので、それを是非台東区のホームページに掲載したり、外国人の方に見せるなど、そこで終わりにするのではなく、それを資源として活用していく仕組みをつくっていただきたいと思います。

○委員

今までのお話を伺っていて、やはり台東区としての強みを伸ばしていくという面が非常に重要だろうとっております。他方で20年後を見据えますと、少子化が進む中、台東区としても子育て世代をどうやって引き付けるかということが重要でして、その魅力あるまちづくりのためにも、この教育というのは非常に関心が高い分野だと思っております。現状を見て、区民ではない立場で少し懸念しておりますのは、学力が東京都の平均、特に中学校に関しては、平成28年度は下がっている、これは年度によって増減がありますので、単純に把握することはできないのですけれども、やはり学力の問題というのは、区民の方の関心も非常に高いわけですし、教育の質を測る一つの尺度であります。この点をどのように考えるかということも非常に重要だと思います。

それから子どもクラブ、放課後健全育成事業、これは全国で本当に問題になっていまして、とにかく足りていない状況です。「小1の壁」ということが言われています。これがやはり充実していないと、子育て世代が安心して教育の面で預けられないだろうと思っておりますので、その面も長期的には考えて、きちんと充実するという方向性は打ち出したほうが良いのではないかと思います。

○委員長

ありがとうございます。もし指導課のほうでコメントがございましたらどうぞ。

○指導課長

本区でも、特に中学校の学力については、大変大きな課題であると認識しております。現在の取り組みとして、まず基本は教員の授業ですので、教員の授業力の向上を図ること、また家庭での学習習慣を定着させていくことも大切です。合わせて、昨年度から本区では民間の学習塾を活用して、隔週ではございますが、土曜日に基礎学力の定着を図るという

ことを目的として講座を開いております。こういった取り組みを重層的に重ねて充実を図っていくことで、子供たちの学力の向上を図っていきたいと考えております。

○委員長

これは私もぜひ申し上げたかったのですが、もし可能であれば次回に提供をお願いしたいことがあります。検討シートにある図表は、台東区の子供たちのマイナス面を見ている情報なので、これを検討していくというのは、今委員がおっしゃったように、これの対策も必要なわけですが、その一方で学力増進のための教員の指導力向上であるとか、あるいは学習塾の活用とか、プラス面の要素もあります。これをずっと追求して、幾つか挙げていただいて、それをさらに伸ばすような方向というのが20年後に記載されるのだろうと思います。良い面をいかにつくっていくのかという、その視点をもう少し挙げたいと思っていまして、その材料が欲しいと思ったのです。台東区の教育状況の中で、これさえ伸ばせばこんなのだという辺りが欲しいと思っています。もし可能であれば、負担にならない範囲で、よろしくをお願いします。

○事務局

資料のほうは、教育委員会と調整させていただいて、また改めて先生のほうからどういった資料なのかというところは詳しくお伺いさせていただいて、調整させていただきます。

＜生涯学習分野について＞

○委員長

それでは次の生涯学習の分野でございます。どうぞ、ご意見等ございましたらお願いいたします。

○委員

コミュニティセンター等の利用で確認したいことがあります。柳北スポーツプラザ等健康を維持するための施設がありますが、この施設は午前枠、午後枠、夜枠の3部体制で借りられるようになっております。例えば午後枠は13時から17時なのですが、借りたい方が集中するとなかなか取れません。その上、時間枠は13時から17時までですが、入退室を含めても17時ギリギリまで使わず、次の夜の団体が来るまで施設が空いたままという状況も見られます。1時間あるいは2時間ぐらいの単位での貸し出しができないか、そしてより多くの団体が利用できる仕組みを作っていただきたいと感じています。

○委員長

施設の時間帯の区切りですね。もう少しシェアできるような時間帯があるのではないかとことです。事務局でお答えできるようなところはありますか。

○スポーツ振興課長

委員がおっしゃったように、貸し出し施設として午前、午後、夜間という枠でやっています。確かに今委員がおっしゃったような利用の方もいらっしゃいますし、逆に時間まで目いっぱいやるという方もいらっしゃいます。基本は今の午前、午後、夜間ということで、特に柳北スポーツプラザは駅に近く利用しやすいということで、稼働率はほぼ100パーセントという施設です。空いてしまった時間帯の有効活用は、他のスポーツ施設との兼ね合い等もございますので、それは状況を見て検討して、将来どうしたら良いかというのは考えていきたいと思えます。

○委員長

これは利用する区民に対してアンケートなどでニーズを聞いて設定するわけですね。

○スポーツ振興課長

利用枠につきましては、他にたなかスポーツプラザやリバーサイドスポーツセンターという総合体育館がございまして、スポーツの練習をする、試合をするということで、傾向としては長時間使う人が多いです。逆にテニスコートについては2時間枠で利用枠を決めて、多くの方にやってもらっているのが現状です。

○委員

1時間空いていれば、そこを利用させてもらいたいというニーズが出るかと思うので、予約が取れる方法として午後、夜というのではなく、2時間刻みで、カラオケで場所を取るような感じの予約方法にできないものかと思います。私も施設をよく利用していますが、空いたままの状態の時がよくあります。今後検討をしていただけたらと思います。

子育てにも関係しまして、どんどんマンションが増えて、大きい声を出さないように子供たちにスポーツを楽しませているのですが、静かに声を出さないようにスポーツをするというのはとても難しいです。19時ぐらいでもクレームが区民課さんに入ったりします。子育てしにくい要因の一つに、のびのび体を動かせる場所がないというのもあるので、有料でも構わないのですが、1時間でも取れるという枠組みが欲しいというのが、よく子育てのお母さんたちから聞きます。

○事務局

スポーツ施設に限らず、施設のシェアについては、区としても検討課題にはなっておりますので、その辺は引き続き検討させていただきたいと思います。

○委員

生涯学習分野は教育の部分と切っても切り離せないところだと思います。これから20年後の子供のことを考えたとき、先ほどの教育のときにも話がありましたけれども、グローバルな視点で色々なものに取り組めるような子供たちを育てるには、例えば学校教育の中で、もっと台東区の歴史や文化を好きになってもらい、「台東区で生まれ育って良かった」と思う子供たちを育てていくというのがあると思います。学校の中で、台東区歴史文化検定のようなものやっけていて、子供たちも大喜びで受けているのですけれども、そういった本で見て学ぶものと、生涯学習として台東区で働いている方や、元気に色々な活動や趣味を楽しんでいるご高齢の方など、目指す良い姿がたくさんあるわけなので、もっとそういうものを組み合わせれば、より台東区が好きな子供たちが育つと思います。またそうした子供が海外に行って、台東区の魅力を世界に発信するような意味でもグローバル人材というのが育っていくと良いと思っています。そのための生涯学習というところで、うまく組み合わせていくということも可能なのではないかと思います。

○教育改革担当課長

学校教育ビジョンのスローガンとしては、台東区を学びのキャンパスというように捉えております。ですので、委員がおっしゃいましたように、台東区の中にあります様々な匠の技を持っている方、あるいは伝統芸能を有している方、技術を持っている方などを学びのキャンパスプランニングとしまして、一つのプランとして企画を立てております。現在100以上のプランがあり、その中にはもちろん上野の山の国立西洋美術館であるとか、そう

いうところと連携したプランもあるのですが、それを学校が選択をして、そしてこちらからその相手先のところに連絡を取って、そして学校教育の中でそれを実践していただく、というかたちで台東区の伝統や文化というものも学んでいくということを、教育活動の中で進めているところです。このプランはどんどん増やしていきたいと思います。むしろご紹介があると大変助かりますので、その点はまたご協力いただければと思います。

○委員長

ありがとうございます。非常に大事な部分だと思います。台東区というのは、他の区市から見るとうらやましい区です。世界の文化や伝統、下町文化もあります。非常に文化度の高いところですので、これを特に小学生の高学年から中学生ぐらいのときに教育できないというのは残念な気がします。今、課長がおっしゃったように、どんどん学びのキャンパスを広げていただいて、朝から上野の山へ行く、あそこへ登校するというような仕組みが必要であるような気がします。それをぜひ望んでいます。例えば美術が好きな子は西洋美術館で朝の9時から5時ぐらいまでのんびり絵を見たほうが、学校の先生たちの美術の授業を受けるよりずっと効果的な部分もあると思います。そういった発想というのをしていただくと非常にありがたいと思います。今日は話題に出ませんでしたけれども、生涯学習センターが非常に充実していますので、さらに発展させていただくと良いと思っています。

○委員

この前 TV 番組で見たのですが、取手市の小学校には、子供が自分の学校の図書館にない本をインターネットで市の図書館から取り寄せられる仕組みがあるそうです。台東区も、自分の最寄りの図書館に本がないと、申し込んでおくとその近くに届けてくれたりしています。子供が今本当に読んでみたいというのが、また少し違ったりも思うので、区の図書館ですと本が充実していると思うので、そういった図書館にある充実しているものを、地域の小学校にも広めて読めるような環境づくりというのが、取手市でやられているようで、良い仕組みだと思いました。興味がある本から読むというのも、学習能力向上において大事かと思います。

○委員長

本というのは教育にとってとても大事な中身で、アメリカの小学校などは、玄関に入ったところから図書館で、そこを歩いて教室に行くような学校も結構あります。図書館というのも今おっしゃったように、区の色々な本と抱き合わせて考える必要があると思います。本が区の財産になるような発想で、これから展開していく必要があるような気がします。

<パートナーシップ分野について>

○委員長

パートナーシップのところでご意見がありましたら、お願いします。

○委員

和太鼓をやっているのですが、その中に、もともと女性だけど、もう性は男になっている、全て性転換をした子たちのチームがあります。そのチームに入って活動できている子たちはとても頑張っていて、色々なことに意欲的なのですが、やはりそこまで踏み込めていない子たちは、世間の目をとても気にしています。その差別が、きれいになることは難しいのかと私は思います。差別するというよりも、そのまま頑張っている子たちを、そのまま普通に応援するというか、そのような状況をつくってあげたいということで、その太鼓のチームはつくられました。とても良いことだと思っています。実際に息子の同級生に、性同一性障害の子がいます。その子は女性なのですが、スカートを履くのが嫌で、でも学校は「スカートを履きなさい、なぜズボンなのか」といいます。とにかくスカートを履くという、制服自体がもう嫌で、本当に細かいところなのかもしれないのですが、そこも既に差別なのかと思っています。制服というのは私たち台東区民としてはありがたいのですが、そういうところの理解をしていってあげないと、こういう問題はなくなっていくのかと思います。

○指導課長

今のお話は中学校長会でも話題にしております。一番心配なのは、やはり相談をしてほしいと言うのですが、当人にとっては相談をすることがそのままカミングアウトになるわけで、それに対するハードルというのはとても高いものがあります。学校には、まずそういったことで誰にも打ち明けられずに悩んでいるような子がいないように、常に子供たちに高いアンテナを張ってよく見てほしいということと、そしてもう一つ、仮にそういった相談を受けた場合に、本人、また保護者、ご家庭、その方たちにとって一番良い方法は何か、このことをしっかりと考えて受けとめていただきたいということで、これは中学校長会全校長がもちろんそういう趣旨を踏まえて、学校でも職員を指導していただいているところです。

○委員長

この問題は全国的に広がっていて、色々な取り組みをしているようです。私が見聞きしている情報でも、ある学校、それは町全体でやっているのしょうけれども、トイレを男女区別なくして、全部個室にしているというところがあります。そのような対応をしていることもあるし、制服の問題も本人の希望、自由にするというところもあるようです。そうすると、制服の意味がないという声もあるわけですがそれでも、それを乗り越える

発想が必要なのだろうという気がします。

○委員

高齢者、障害者、外国人など、多様な人々が積極的に地域活動に参加し、地域コミュニティが活性化していくことが重要です。台東区は色々な方が混在していますので、もう間違いなくそういった方たちに地域活動に参加していただいて、そして大事な一員としてこの台東区を盛り上げていただく、そういった仕組みを考えていくのは大事なことかと思えます。

私は、支援している外国人が、実際にこの台東区で活躍をしていく仕組みにするとしたら、どこから議論していったら良いのかと考えています。もちろん日本語能力も必要になると思うのですが、それは区民課さんで行っている日本語教室に一定程度通うと、どこかに出掛けたりするぐらいの日本語ができるようになります。そこを卒業した方が、例えばコミュニティや、新しく入居した外国人の方をお手伝いする仕組み等、学んだことを活用できる、お互いに支援し合い活用したりする仕組みをきちんと考えていけたら良いと思っています。外国人の方への支援だとしたら、すでに住んでいる住民の方たちに地域活動やお手伝いに参加していただけるような組織づくり、そのようなアイデアを具体的に考えていきたいと思えます。

○委員長

ありがとうございます。今の話はかなり可能な気がします。学んだ外国人がそれをまた生かして、一つのコミュニティというか仕組みをつくっていく、それは多分今でも現状としてあるのではないのでしょうか。

○事務局

現状の組織づくり、システムづくりというところの点では、在住外国人が地域社会の一員として活躍するというのがまさに課題になっているという状況でございますので、その解決の方向性としては、多文化共生の推進で、その後では具体的な施策としてどうしていくのか、というのは今後の長期総合計画、行政計画といった計画に落とししていくところなので、基本構想の在り方としては、やはり外国人ですとか、あるいは先ほどから出ているさまざまな多様性の問題になってくると思えます。つまり、そういった方々との共生ですとか、そういった20年後の社会になっている、台東区になっているというのが基本構想における一つの目指すべき姿になってくるのかと、きょうの各委員のご意見を聞いてみると、そのような感想を持たせていただいたところでございます。

○委員

今のは良い提案です。外国人が素晴らしい人であれば、町会の役員に入れたらどうです

か。事例を作って、そしてどんどん拡大していくと良いと思います。

○委員

ありがとうございます。本当におっしゃるとおりで、私もそういうことになるべく参加していただきたいと思っています。それから、台東区は色々な歴史からも新しいものをうまく取り入れて発展してきた過程もあります。在住外国人が今後日本化していきますので、そういったところから生まれる台東区のオリジナルの文化、在住外国人が日本化してきたことによって生まれてくる台東区の新しい文化を大事にしていきたいと思います。今いる外国人がいつまでもお客さんではない状況になってくると思います。

○委員長

やはりお客さん意識というのは、当事者本人たちもやはり脱却したいと思うのです。それが多文化社会だろうと思います。

○委員

パートナーシップの分野は、色々なものを含んでいるので、多文化共生なりダイバーシティ（多様性）の視点というのは非常に重要です。特に台東区が特色ある取り組みができる分野だと考えています。それと同時に、地域との協働といいますか、連携というのもこのパートナーシップの中には入っているようですので、私はむしろ委員にお伺いしたいことがあります。台東区の町会や自治会の加入率等は、恐らく他の自治体に比べるとかなり高いのではないかと推察します。今後これから高齢化がどんどん進む中で、その担い手の問題ですとか、あるいはその組織自体が維持できるのかという問題もあります。共同住宅の割合がどんどん増えてきているところでは、将来的にはかなり地域における協働の担い手が厳しい状況に置かれるかもしれないと思っています。現状でもし他の自治体と比べてまだ維持できているということであれば、その強みを生かしていくというのも一つの視点なのかと思っています。

○委員

実を言うと、どこの区も四苦八苦しているところです。高齢化時代になってきているということもありますし、皆さん町会役員や会員さんの入会というのは悩んでいます。台東区でも一生懸命パンフレットをつくったりして努力しているところです。私が提案しているのですが、大きなマンションができたら、そこから役員の人を選んでしまって、その人が役員会に出て、帰ってまたマンションの他の人たちとの会合場所をつくって、月1回でも良いから食事会をしながら報告をするというのではないかと思います。町会で今何をやっているのか、区でどのようなことをやっているのか、全部報告が行きます。何日に防災訓練があるなど、いろいろなことがあると、そのようにして、マンションを巻き込んでし

まって、そこから役員を1人出してくださいというかたちにすれば、情報も早いし、出てきてくれると思います。そういうことを一生懸命やっているところです。

○委員長

まさに地域コミュニティのつくり方のノウハウを今ご指摘いただいたような気がして、将来展望にそれは望ましい姿なのだと思います。非常に良い話を伺いました。

もっといろいろな意見を伺いたいところなのですが、これまで4つの分野についてそれぞれ現状を踏まえた上で、新しい時代に向けて課題とか、このような方向ではないかというアイデアを頂戴しました。次回アイデアをもう少し深めて、具体的なキーワード探しをする、そういった回にしていきたいと思っております。本日の会議は一応ここまでにしておきたいと思っております。

3. その他

○事務局

—議事録及び次回審議会についての説明—

4. 閉会

○委員長

遅くまで事務局の方もありがとうございました。これにて今日の会議を終了いたします。ありがとうございました。

(午後9時00分閉会)

以上